
『ホラーホラー・フェスティバル～数珠繋ぎの作者たち～』 第4話

霜月 沙羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ホラーホラー・フェスティバル』数珠繋ぎの作者たち』 第4話

【Nコード】

N0399B

【作者名】

霜月 沙羅

【あらすじ】

小説サイトに一斉にホラー作品を投稿した作家がつぎつぎと自分の作品に沿った怪奇現象によって怪死していく！！残った作者たちは次は自分かと恐怖におびえるが……『夏ホラー』後に企画された『ホラーホラー・フェスティバル』数珠繋ぎの作者たち』リレー小説第4話です。

（前書き）

この小説は、今年の夏に行われた企画、『真夏のホラーフェア』を題材にしたリレー小説です。現在、ひとやすみ先生↓和佐先生↓アオキチヒロ先生↓霜月 沙羅という順番です。

これを読む前に、ホラーホラー・フェスティバルの第1話から読むことをお勧めいたします。また、「夏ホラー」で検索すると出て来るホラーフェア作品を先にお読みになさると何倍も楽しめるかと思われます。

猫が、鳴いていた。

みゃあみゃあと、雨に紛れて聞こえてくる仔猫のような鳴き声。

「近くに猫がいるんだね」

窓辺に立つと、網戸から入り込んでくる雨粒が顔に当たって気持ちがいい。

「何で？」

これは予想していなかった反応だ。母にはこの鳴き声が聞こえないのだろうか。窓を閉めても依然として鳴き声は聞こえてくる。

「鳴いているじゃん」

「聞こえないけど。幻聴じゃないの」

母が笑った。私はそんなことない、と言い切って窓から離れ、ソファに腰を下ろした。

横にある勉強机の椅子の下に置いてある携帯電話を開いてウェブに繋ぐ。いつもならお気に入りリストから他のサイトにアクセスするのだが、ホラー好きな私はたまに怖いサイトを回ってみたい衝動に駆られる。まさに今の状況が、それだ。だから『霊』『死』などのキーワードを入力してみた。ずらりと検索結果が表示される。そ

の中に気になるものがあつた。

『・・・の事件、私も霊的な存在によるものだと思うよ・・・』

事件、という単語に反応した私は、そのサイトにアクセスする。黒い背景に浮かぶ赤い文字が、何とも不気味な雰囲気醸し出している。そこは、オカルト関係の話をする掲示板らしかった。

426：ジュン子 10/12 08：23：21

女子高生が飲酒運転で死んだ事件、私も霊的な存在によるものだと思うよ。だって、あんな人通りの多い交差点、しかも通勤や登校の時間に背中を押す奴なんていないでしょ。絶対誰かに目撃されるだろうし。

427：ゴーストさん 10/12 12：25：12

だよな。あれはただの事故とか事件じゃないに決まってる。警察は何やっても意味ないっつの。

428：熊 10/12 23：11：25

そういえば、この前の男子高生が行方不明になった事件だっておかしすぎますよね。確か、“消えろ”だっけ？ そうやって血で書かれた文字が残されているなんて、霊に殺されちゃったんだろぅなあ。

429：ナツミ 10/13 14：52：01

殺された人の首に、赤ちゃんが付けたような小さな手の痕がついていた事件も最近ありましたよね。

掲示板で取り上げられている事件は、私の記憶にはないものばかりだった。そういえば最近ニュースを見ていない。今日は、雨のせいで気温が低い。冷え性のせいもあり私の足は氷のように冷たくな

つていたので、ソファアの上で足を丸めた。

『こちらが、事故現場の交差点です』

テレビからアナウンサーの声が耳に入ってきた。私は携帯電話から顔を上げ、テレビに視線を移す。視力が悪いため、ここからではテレビ画面の右上に表示されたテロップが読み取れない。ウェブに繋いだままの携帯電話をソファアの上に放り、画面に近づいた。

『またしても飲酒運転により女子高生死亡
背中に残る手形の謎』

と表示されている。手形、という文字に私は口をぎゅっと結び、ぴんと背筋を伸ばす。

『被害者の背中には、手形のような鬱血した痕が残っており、大阪府警は事件の可能性も視野に入れて捜査を続ける模様です——……』

先ほど見た掲示板に書き込まれてあった、飲酒運転により女子高生死亡って、もしかして。

「どうせ、顔見知り突き飛ばしたんじゃないの」

母は煙草をもみ消しながら呟くと、腰を上げ台所へ向かった。

突き飛ばされた女子高生、消えるの文字、赤子の手の痕……。頭の中で言葉にしてみると、背中にぞわりと寒気が走った。私は、何かを知っているような気がした。心臓が早い鼓動を打っている。二ユースは政治関係のものに代わり、猫は相変わらず鳴いていた。

私は画面から顔を上げて首を回すと、立ち上がって台所へ向かった。フライパンで炒めものをしている母を横目に、手を伸ばしてコップをとる。烏龍茶をたぶたとコップに注ぎ、ソファーに戻ると再び携帯電話に目をやる。そこには、新しい書き込みがあった。

430：ウラボン 10/13 18：43：03
みんな死ぬ。

片手にコップを握ったまま、私は固まった。自分でも心臓の音が聞こえるほど、脈は速くなっている。

画面の右上に表示された日付と時間を確認する。

『10/13 FRI 18：31』

有り得るはずがないんだ。携帯の時計は間違っているわけがないし、掲示板の時間表示が狂っているというのも考えにくい。そして名前は『ウラボン』。今気付いたが、今日は十三日の金曜日なんだ。不吉な予感がした。

私は息をゆつくりと吐く。胸の中の嫌なざわめきも、頭の底では薄々感づいている可能性も、全て身体の外に吐き出したかった。母が作ったのだろう、カレーの匂いが漂ってきた。

私はお気に入り一覧から『小説家になろう』を選択した。烏龍茶を一口飲み、夏ホラーと入力して検索する。真夏のホラーフェア、という企画が夏に開催された。怖い小説を書いてお盆に一斉投稿しようというもので、どれもすごい作品だった。見覚えのある題名が並ぶ中、それはあった。

『盂蘭盆』

私が投稿した小説。お盆に係する作品を書こうと電子辞書で『お盆』でキーワード検索しているときに見つけた言葉だ。読み方は、「ウラボン」

耳元でいきなり声が聞こえた。びっくりとして周りを見渡すが、家にいるのは私と母、睡眠中であろう三匹の飼い猫。普段と変わらない母の後ろ姿からするに、今の声は私にしか聞こえなかったらしい。唇を噛みながら、私は画面をスクロールした。すると、一番最後に『ホラーフェアへ参加された方々へ』という題名の小説があった。こんな題名は見たことがない。疑問に思いながら、その作品を開いた。

『ホラーフェアに参加された方々へ
作：アオキチヒロ

私知っている全てをここに書き記します。

- ・2つの怪死事件は、ホラーフェアの小説に似ている。・和佐先生曰く、これは小説の呪い
- ・自分が書いた小説通りに死ぬかも知れない

何かこれ以外に分かったことがあったら、教えてください。』

全身に鳥肌が立った。先ほど頭をよぎった考えが形をなしつつある。アオキさんは、確か大阪に住んでいる女子高生だったはずだ。そしてホラーフェアでは二つの作品を投稿していた。

そして、先ほど見た掲示板で取り上げられていた事件。赤子が出てくる小説も、消える——つまり“キエロ”の小説も、ホラーフェアで投稿された作品にあった。何よりも、あの不可解な交通事故。

「そんな……」

信じたくなかった。しかしニュースとホラーフェアで投稿された小説はあまりにも酷似している。

私は自分の腕に爪を立てた。もし、もし本当にそうならば、三人は——。新作を読むことも出来ない。私は携帯電話を持ったままトイレへ向かった。

Gパンを履いたまま便座に座り、目の前に貼られたカレンダーを見つめた。ホラーフェアに参加して、もう二ヶ月が経つ。アオキさんが最期に発した私達へのメッセージを読み返すと、最後の項目が目にとまった。

『自分が書いた小説通りに死ぬかもしれない』

なら、私は近々女と出会うことになるはずだ。髪の毛の長い女。私は携帯電話を閉じると、胸の前に両手で包んだ。少しだけ、温かった。

＊ ＊ ＊

「ちょっとスーパー行ってくるね」

カレーを食べ終りソファアの上で横たわっていた私に、洗い物を済ませた母が告げる。私は勢いよく起きあがった。

「何で？」

「ビールがきれてたの。本当はジャスコ行つたときに買ってくるはずだったんだけど、忘れちゃって」

「良いじゃん、一日や二日」

お願い、私を一人にしないで。

「良くないよ。歩きだから三十分くらいだと思う。じゃ、お留守番よろしくー」

願いは届かなかった。母が家を出ていった後、私はテレビの音量を上げ、引き戸で仕切られた隣の部屋の電気を点けた。階段を降りる足音はだんだん遠ざかってゆく。

私には使命がある。アオキさんのように、残りの方々に真夏のホラーフェアにかけられた呪いについて伝える使命。携帯電話を開き、小説家になるうを開く。私が選択したのは、『小説家になるう』秘密基地』という交流サイトだった。仲間募集、のところを開き、真夏のホラーフェアのスレッドを探した。

そしてそれはすぐに見つかった。私は書き込むことにする。

『霜月 沙羅

ホラーフェアに参加した方々に伝えたいことがあります。突然ですが、最近のニュースは見ましたか？ 交通事故のニュースや、キエロの文字、赤子の手……そしてそれらが出て来る小説を読んだ覚えはありませんか？ ……私達は死ぬのだと思います。詳しく話すと、』

ふっ、と明かりが消えた。

突然のことに驚いて、途中までしか入力していないのに送信ボタンを押してしまった。

ご飯は炊いていない、エアコンもストーブも使っていない。ブレーカーが落ちたという可能性は低かった。その他の原因による停電は、雷が鳴っているときに一瞬だけ消えたことしか体験したことがない。

——どうしよう。

薄暗いと、色々なものが人影に見えてくる。未だに聞こえる鳴き声が余計に怖さを引き立てていた。その内目が慣れてきたので、私は腰を上げて一応ブレーカーを見に行くことにした。玄関マットが見えてきたところで、ふと気がついた。

鳴き声が、近すぎる。

直後、私は見てしまった。玄関にある人影を。ぎくりとして顔が強張る。漆黒の髪は長く、背は私より少し高い。ロングスカートを履いていることから察するに、女だ。女は背中を向けたままで、メトロノームのように頭が左右に揺れていた。

早く、逃げないと。

そう思っても、足が動いてくれないのだ。目をそらすことすら出来ず、私は女の頭を凝視していた。

……カレー、美味しかった？

頭の中にはつきりと届いた声に、私は聞き覚えがあった。『孟蘭盆』を執筆しているときに幾度となく想像した、あの、女の声。

「カレーって……」

自分でも情けないほどか細い声だった。膝がカタカタと笑っている。鳴き声が私の思考を鈍らせていた。

すり替えたのよ。あなたのママはまんまと騙されて使ってくれた。

「何を……」

めまいがする。私は横にあるげた箱に手をついた。猫は、すぐ側にいるに違いない。突然、女の胸元から何かの影が飛び出した。尻尾の長い真つ黒の、猫。女が抱いていた、猫。

尻尾を大きく振った後、猫はこちらを振り返った。みゃあ、と一声鳴く。

「ひ……」

声にならない悲鳴が私の口から漏れる。無理もない、だって猫の顔半分は肉が削がれていて骨が見えていたのだから。本来なら眼球

のあるべき場所は、ぽつかりと穴が空いていた。

カレーの肉、この子を使ったのよ。

この展開を私は知っている。ホラーフェアで書いた私の作品に、人肉じゃがなるものが出てきたことは決して忘れていない。さーつと血の気が足下から引いてきた。息をするのが苦しい。

女の足下にいる猫は見るに耐えない顔を私に向けたまま大人しく座っていた。

ふふふ……。

頭の中で響く気味の悪い笑い声につられて女を見上げると、首がねじれて頭だけがゆっくりと回っていた。気を失いそうになる。百八十度回ったときに現れたのは、白目をむき不気味に口を歪ませている顔だった。

女がのらりくらりと近付いてくる。私はしゃがみ込み、両手で頭を抱えた。そして、目を固くつぶる。女は私の頭を両手で挟んだ。冷たさが髪の上からでも伝わってくる。凄まじい力で、女は私の頭を回し出した。首が、ねじれてゆく。

シニタク……ナイ。

「一緒に、行こう」

——尾を引く猫の鳴き声が、私が最期に聞いた音だった。

（後書き）

読んで下さりありがとうございました。またしても怖くなかった
らすみません……。他の方が書かれる第5話にご期待下さい（笑）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0399b/>

『ホラーホラー・フェスティバル～数珠繋ぎの作者たち～』 第4話

2010年10月14日21時34分発行